イブセン
ダンテ
トルストイ
シェリー
アーノルド

# 研究

本間文庫
文庫 14
A 111
10

イプセン

文庫14
A11 1
10

① 

# イブセン（明治四十年九月十六日 英文三年生）

Henrik Ibsen の生れたのは1828年の三月廿日で、つい去年死んだ。生地は Norway の Skien といふ所である。今其の前後の諾威の状態を調べて見ると、猶ほ[illegible] デンマークと同[illegible]支配の下にあつくの[illegible]と十五世紀以来で彼の佛蘭西革命後千八百十四年（デンマークから分離）瑞典の王の下に独立した議会政治の国となつたので専[illegible]をして文藝に於いては其二十年余も後千八百四十年代が諾威文学の十九世紀の夜明とも見るべく其代表者は詩人 Wergeland (1808–45) と

詩人 Henrik Johan Sebastian Welhaven ( )

②

の二人で、政治上でも民衆と王党若しくは貴族党とが争ふやうな時代が出来て、文学上では純ノルエーの地方語をもて純ノルエーの文学を作らんとするものとの争が激烈を極め文学史上の特色なる。これは欧洲の他郷に例の少ない程此の国の特色と見られて居る。併しゴルゲランドは農民党及び国民文学党を代表しアルハー公と共むしろ王党として欧洲王及び文学言語として丁抹及び在来の関係を保って来た。除去して進まんとした民族党に異し両派錯を割って残って、併し ウエルゲランドの生前は諾威のニラーと称せられて人気は此方に多く集まってゐたが其早死後は段々ハー公に傾けて文学の中心になった。[illegible]七に傾んだ

而て伝ってゐる二種の民謡民話集 Edda と云ふ

一は の Edda といって歌で十二世紀頃のもの、一は

③

Younger Edda といって十三世紀頃 Iceland の Snorre Sturlason といふ詩人が古田エダの佳秋的に書いた散文のもので何れも古の北欧民族殊に諾威海岸から Iceland 辺の民族の感想を蒐ってゐるのである。

け Edda と一つは Saga といって之は伝説とか詩話とかを基とが殊には此の北欧地方の神話勇者譚を集めたもので此等の古代の話である。此両者が諾威民族の祖先の文学であるとなれば一時全く丁抹の下に荒廃して居た言語まで丁抹化しかうとしたのを十九世紀に至って革命を起して独立させようとしたのである。イプセンの生れた千八百二十八年頃から千八百三十年十年に亘っては欧洲のあらゆる方面が華やかの気に満ちて所謂ロマンチシズムの行はれて居る時代である。北欧ではゲーテの死せる前後、英ではテニスン、ブラウニングの出づる前後（ワグナーの出る）

仏ではユーゴーの手でローマンチシズムの樹立せられる前後と云ふ形勢であつた。（イブセンとトルストイとは同年生）さて斯く欧州全体の調子を合せて起つた諾威の新文学は Kielland と Welhaven との時代にて居る Ibsen と Bjørnstjerne Bjørnson (1832– ）との時代である。丁抹の評論家 Brandes の言に依ればブヨルンソンは諾威農民の為民は精神を生命とし、イブセンは凡ゆる欧洲の全体の時代精神を生命として居る詩であるとも言へる。

（ブヨルンソンの作では Synnøve Solbakken と題する小説が最も有名である。）

其二人の外に二人加へて Jonas Lie (1833– ）で其小説は最も世の要を得たるである。其三人の時代が千八百六十年代を中とし二三十年、千八百八十五年頃から其に新しい時代



である云ふものか、（Kristiania-Bohêmen 中の Hans Jæger の Bohêmen と云ふ係）其說に従へば此頃までイブセン、ブヨルンソン二氏の外には大なる作家なく、読得 Problems を取扱って、Zola や Maupassant の主義を採用して直に発展する人生を見るやうな、従って有名な作品の続出した時代が続いて居た。然るに此頃（1885）から政治上の変動と共に思想も更に新機運が動いて又新し、藝術が勃興し、其作品が再び世に於て唱され、健全なる写実主義、乃至理想主義、個人主義若くは極端に真率な作品が奨励せられ、所謂頽廢して居る諸が起り来りして現代新進の人々が起つた。（ゴッスの諾威の

⑥

伊傑の精しい

イブセン研究の参考書は先づ伝記では同国人 Henrik Jaeger 氏
の書が最も普及的なものとせられて居る、評伝ではイブセンの紹介者として
名高い Brandes の Ibsen and Bjørnson と題する書中の
即ち first impression (1868) second impression (1882)
third impression (1898) 又彼を始めて英国に紹介した功ある評
家は Gosse 氏で其1889年に出した Ibsen 論は其著 Northern
Studies の中に這入つて居る Shaw の Quintessence of
Ibsenism に近頃出た Commonplace 即ち書集一号 又
英の Jeannette Lee 氏等の論文等其他凡て近

⑦

代の欧州文学を論ずるものはイブセンに論及しておらぬはない、又
彼の著は悉く劇及び劇詩であるが詩集もある、劇は大抵長く
英訳せられて居る重なる訳者は Gosse、Archer、Herford の諸家で
ある、彼の作風の影響は英で Pinero Shaw
北で Sudermann Hauptmann 等に直接間接に
影響を及ぼして居る、近世の欧州劇は一時殆ど凡てイブセン
の風を学んだといはれる、此論者の作でも史劇社会劇皆其の及
から来たものがある、之れは早稲田文学三十九年七月の巻に於ける
略伝で分かる、

(1)

Hedda Gabler

一、此作が Strange な Powerful な作品では有るが難い、恐らくイプセン作中最佳作（少なくとも其一）であらうが、読み了つての感を云へ
種類異の作である、全体今まで研究して来た諸作について言つて見ても此作程クッキリとした違つた面目を見せて居るのが少い、
皆夫々に特徴を示してゐるが此作の特徴は一種別な気味とする点に存する。従来の文学が人が Strange な様に訴へて同情を
得やうとするに対して此作は丸で違つたやり方をして居る、コンベンションで全く是は、言ひかへれば但し主人公が死ぬる悲劇であるが、普通
の悲劇の中に有る斜の悲壮な様を見ずに取つても居でなく

言はゞ悲しい悲劇である、是が此作の全て風味を異にしたものである一因と信ずる。凄い古い味である。冴え切つて冷たい味である。ヘッダは夜の海に光る燐の静まりかへつた中に死んでゆく、レーヴボルグは一味の熱が加はつて火のやうに燃え切つて死んでゆくが、此は其劇に自分等で一つの心を四つにする程の力はない、又テスマン夫とテヤは何れもよく書けて居る性格であるが、一は善人の弱い人、一は[illegible]の無邪気な女として美しく面白い人物であるが、併しながら此等は結局はヘッダを強く見せる為の配色対照たるに過ぎぬ。此等の人物が始めにヘッダを中心にしたる凄い蒼黒い色に或は華やかな或は[illegible]の軽快な色や或は[illegible]の濃い色やが加はる色彩は豊

②

富になつて居る。結局はヘッダで調子を取つて居る。夫のヘッダは自由不思議を求めた男らしく死んだのだが普通人の夢める所でテヤの情に助けられて生きてゆくのが人の残しとする所が併し実際どちらが豊けかと言へば意味ことをマリアに有る説は異説だと思ふ。そんな者は我等には知らぬ。此作などまる最もいい自然主義の作例であるまいか。ゴッスの如き通人でもイブセンの作からの言ふ通りである。生きられた現実世界の一片を切り出して其儘に載せたまゝ我等の前に提出したのである。解決は何もなくして只此作は悲しい人生である。而して其の来に於いて例のもく我等をして首を傾せて考へさせる。由来此作は甚だ[illegible]幕（ヘッダの）死を以て終るまでの所は印象

が極めて明白に気味悪いまでの写実で出て来て居るあの(前後の)遊か
ら凡てぼんやりとぼかされて出て居る。テニヤとテヤらの干係でも(一つ)グの
心持ち手換へから(前後)死ぬまでの[illegible]心の経過でもブラブラタ
ッヴウしいやり口でも凡て鋭く乱けてある。即ちあの辺かと充
景的なPathosになつて凄味が減じて居る。けれども尚ほまに
なる場面で、(一つ)グのなんと煤は出ない。燥つてゐるまでの場面では全く
ただ心持ち汚れたきり減てばかりになつて出て居るので其のぼかしに
なつて調子の強さとイガ何うなるかを言へば云はず、人物を[illegible]
をつける。只凄い一方でなく先へ先へとして、ここに迄ますれあつた
氏鋭みが足して来るを見られる。調子が強めてある。けれども[illegible]
味である。其他(一つ)グはSelf[illegible]他の[illegible]絶[illegible]
Public Scandal

(3)

を唯一の道徳とした卑劣な(弱い)現代文明の醜い一面の権化
と見られた女性でありながら西洋の婦人が持つてはゐる。それを自分
かつて捕へ争ふつつあるのである。從つて此婦人は[illegible]
[illegible]涙の同感は起らず、むしろ憎らしいとする程にもなる
ばかりであるのを除けて其中[illegible]を見せて涙を零させるやう
なる事をせず飽までも其憎らしい主人公として何も人を[illegible]て
誇張化しあと思はしめず如何にも現代文明の産物たる婦人
であると思はしめて居る。つかず其一挙一動に注目せしめる。
死ぬまで彼女は自己の利害の外何ものも考へて居ない。自分
の悪名が広まりはしないかと自分の[illegible]を愛する一念になつてゐるのである。
其の凄味がある所以である。而も妖婦の[illegible]彼女も死ぬる際はやさしい
人[illegible]があり、幕の[illegible]を出して前後を[illegible]である。又都合

文學概論

六、

（昭和四十年九月十四日　英文科一年にて）

ノラの所としては太の（ヘッダの最後の前の…）、則ち（ノラ）んでからピストルの音のきこえるまでが馬鹿によく外にカーテンでかくしてある光景は眼の前に如見えるやうで、其他（ヘッダとブラックとの對話）からテスマンの膝にを言ふ迄（夫の兩人の對話はさーわるまでも）（ヘッダとテヤとの初對面の對話。レーヴボルグを持ちほけて紙の包みの原稿など何ルか。如を極めてゐる。

(1) 周到で、(2)（ヘッダは陋劣な女性の自由の極点(3)イプセンの上表の細密(4)（ヘッダに同感…性を…(5)（ヘッダの値…(6)（ヘッダとレーヴボルグ…ブラックとの千係不明(7)ピストルを…(8)…前二作の作…(9)…(10)三一致…(11)…(12)…(13)レーヴボルグの…(14)（ヘッダは…(15)…(16)…(17)…(18)…(19)…(20)…

(1

# Lady from the Sea

性格の上に於て見るのは Ellida、Hilda、Lyngstrand、そして Wangel は夏の様なもの。Bolletta もそうである。Ellida は~~[illegible]~~ヒステリー性の婦人として描写されつつ、Hilda の性質は Romantic thrilling を要求する…ずっと…性格はよし。Lyngstrand の Selfish な（自分が芸術家）凡庸な人物なり。

Wangel はボレッタがアーンホルムに話す所でよく其性格の一端がでている。即ち与えられた[illegible]の thing なく常に家の中を cheerful 色のものにしようとする、弱い一種の人物である。ボレッタ又平凡なる[illegible]の[illegible]な者らしい一婦人となった[illegible]

其[illegible]には之れ丈の見えるやうな[illegible]近代の如き劇家あまり
せたとしては[illegible]の風景の上を去って[illegible]先づ[illegible]
又全体の空気が[illegible]で[illegible]が多く戸外で
ある[illegible]近代の[illegible]の[illegible]を[illegible]て[illegible]の物性と[illegible]
香ひを帯びて現はれ[illegible]一方から見れば[illegible]の[illegible]と調和せ
如ば近代の[illegible]北欧の[illegible] dark and gloomy の香が十分に[illegible]
せて[illegible]近代神秘的な[illegible]は[illegible]
る。そして近代全体[illegible]は何[illegible]に其の神秘
的[illegible]に於て[illegible]である。Symbol といふ Symbol
をして[illegible]を[illegible]
して[illegible]の劇の[illegible] Symbol の Soul をして[illegible]
[illegible]



[illegible]を[illegible] conventional moral と[illegible]
[illegible]他方に[illegible]とする[illegible]を示して moral の[illegible]
[illegible] moral に[illegible]
[illegible]解[illegible]自己[illegible] moral
[illegible]解決を[illegible]の[illegible]近代[illegible]劇は[illegible]
の解決劇であって[illegible]の[illegible]劇には[illegible]
[illegible]劇[illegible]解決の[illegible]を[illegible]近代
の[illegible]は[illegible]でも例外である[illegible]で[illegible]解決[illegible]
である。併し[illegible]解決[illegible]
[illegible]
[illegible]の文[illegible] Poetry[illegible]

中の二大風潮派たる Mystic Poetical と Natural Realistic とは畢竟
調和しておるか怪しく、Real Natural と飾り無しに [illegible]より筆やらの
となるのではないか、〔リガ自由人 [illegible] を捨てる〕
又此作にも例のごとく過去を〔現在の中で現はす〕[illegible]方式を用いてある所一篇
に前にも [illegible] を見る事に、[illegible]に [illegible] 掃へして [illegible]
逆にも進んでゆく手段です、又此よ [illegible] 所で許すを見に見れない
多くの書画や詩画を此作中に容れてある。
Ibsen Secret の暗示は Symbolism と見る [illegible] 一人で書かば此作を完
Good beautiful なるは Gods の Weak powerful なるを許すとなし又此作
作家の [illegible] 作は前者の如く、[illegible] 明にして、好い此作までが悲劇
比較

(3)

一つ [illegible] である [illegible] individual の内部に入る
此作で社会の [illegible] 個人の [illegible] 動して
ありて [illegible]、individual soul の内部に入って [illegible] 此作で Ibsen の Message の
[illegible] の [illegible] である [illegible]、其他
Model Marriage Science and Mysticism.
World knowledge. Mutual understanding
Love and Strong will [illegible]

ダンテ

イタリー文学上代史

(1)

イタリーの言語は第五世紀北方人侵入(ゴート)羅馬帝國の後衰
種々の地方語が分流するに至つて其内フランス、イタリー[illegible]近つ
て来て純粋のラテン語とラテン語から変化して来た俗語を称す種々のイタリー地方語と
と伊語とあり　重ねてラテン語は純学者語で伊語は伊太利俗語と
が混じつつ競争しつつして居ったがいよいよ一般に伊
太利語が勝利して　伊太利語は即ち[illegible]の
が主となつて言語の上での文学語である。
北方諸語は十二世紀頃からフランス語又はプロヴァンス語、イタリー地方語又はイタリー地方語の[illegible]
るまであり　十二世紀頃まで漸く上に立つ大[illegible]の機運

ご始り、此時代になりて宗教的抒情詩、非宗教的詩歌が
起つて併し之は其寡なるものであるまいなるものであつて
まづ十三世紀頃人々に接する文学であつた。言は此世イタリー
文学の[illegible]序幕であつて、即ち後、世で Toscan
School と称せられる Guido Cavalcanti であるとか
Lapo Gianni とか
Cino da Pistoia であるとか又 Dante Alighieri
であるとか言ふ人々があつて是れから抒情的な詩を作り始めたのであ
つて是等の人々の詩は何れもと言つて我文学の端緒ある[illegible]
開ける所で、其中でも Dante は其初年[illegible]

(3)

Dolce stil nuovo で詩は大と西方と其に言はば古の風に属する文学とは
之を併せ新文人の遠祖と見てもよい。イタリーの散文は此際
まで殆ど文学らしいものは見当らぬ。つまり此純詩
やらうが十三世紀に多少出かけたことで見るもの
斯くてダンテは一面イタリー初期の抒情詩風に属す
ると共に新文学の遠祖でもあり又同時に彼の大作
Divina Commedia で一躍してイタリー第一文学世
界に於て戯曲詩人になつて、Dante のことは別
に言ふまでもない。彼の後継として Petrarca 十四世紀の人

於いてに Sannazzaro が彼の最も有名な牧歌の詩を集めて（の牧人の歌）
あまでダンテにしも人目的な好く表はしに於て始めて
洗練して詩人である。彼はギリシアラテンの古典の研究（普通の）
完全であって、彼は Boccaccio も田園時代の人で同じく
古典を保ち始めて Ameto を翻訳して、けれども又彼の民衆的
[illegible]の事業は [illegible] vernacular で前も又それよりに大衆的である。
とが大程 [illegible] elaborate して技術的ではあるが始めてである。
小説の面とってよく又フィリの始文の点といってよい。下って
此の上、歴史上、海外上の話ども出で又喜劇も出来るが
戯曲では Sacre rappresentazioni は中世紀の上まで遡る田ラテン

(三) Lorenzo di Medici (1448—1492) 政治家 藝術保護者

詩であるいふやうなイタリーの文学の中で作り出して書いたギリシア
戯曲に迄も発せられて居る。
更に十五世紀に入り始めて所謂 Renaissance が発現して（あらゆる方面が）
来る。並に詩人達は新鮮の気が溢れた人
写って職業の所が極って、此時の文藝の中心は伊太利
Florence であって其の代表者はギリシアの跡を追ひ
かんな形で保ちながら精神が用ひに現代である詩人
たる Lorenzo de Medici である。又當時文化の保護者
であって、Florence、Roma、Napoli 等の宮廷が
出来て二十六歳にて文藝復興は直接に

①

# ダンテ研究

Dante Alighieri (1265—1321)

Bibliography

著書

(1) "Vita Nuova" (Trans. by Rossetti) (1292年頃) 新生、彼の前半生の自伝とみるべし 彼が生の理想の女 Beatrice の死後を中心として

詩を集め散文で説明を挿んで最も面白いもの、

(2) "Convito" or "Banquet" 彼の精神上の或時期(やや) 花展懐疑時代を示すと評せられ、その時の叙情詩の説明を子形を取って居る不

完成の書 (1490 刊行)

(3) "Divina Commedia" 全精神の根本 (三)

---

Niccolo ~~Di Bernardo Dei~~ Machiavelli (1469—1527)

Ludovico Ariosto (1474—1533)

Torquato Tasso (1544—1595)

(上) しあらゆる形式の文学が起って中には[illegible]純文学の戯曲、[illegible]

Machiavelli が政治上史学上等[illegible]

Romance など歌う詩の大家として Ariosto、ダンテの後、

継といわれ (3) に類する詩人として Tasso などが出

く 而して十六世紀の末期から十七世紀にかけては

Decadence の時代で十七世紀時代の文学を ~~Sec~~

Secentismo と呼び誇張派と見なされ空虚な文学

の時代であった 十八世紀[illegible]も遂に

十九世紀の新しい文運回轉になったのである、

B. X. Bernardo ~~Dei~~ Machiavelli

(2)

(4) 以上三書を[最も著名なる]ダンテ学者の一人[illegible]は[illegible]と見く、

De Monarchia 彼の政治論たる[illegible]

其の定説、前三書に次いで重要と見なす者(伊太利語にて[illegible])

(5) De Vulgari Eloquio 彼の俗語論(羅甸語論、伊語訳)

(6) 外に Canzoni 即小詩歌集を書く

Divina Commedia の英訳

(1) Cary (Henry Francis — 1772–1844) 1805年

Inferno を訳し 1814年完成し、忠実で情が[illegible]

かつ[illegible]得難し、之を推すべし

(2)

(2) Longfellow の訳にて[illegible]し 対訳(1867)

(3) E. H. Plumptre 対訳(1887)

(4) A. J. Butler 散文訳(1892)

(5) C. E. Norton 散文訳(1892)

以上が完訳、(注意には Cary, Longfellow, Norton の三訳が

最好、訳 — "The great poets in Italy" by Oscar Kuhns — 1903)

参考書

ダンテの詩は[illegible](殊に[illegible])がダンテの人[其[illegible]]でも[illegible]人がある

らねばならず。ダンテの伝といふものは今日に於て精細に知られ、其の伝記並の歴史を言へばダンテの時代の史家で John Villani がダンテの為に其の史中に精しく彼の伝を書いたのが最古最も貴重なものである。然して稍後年の人 Boccaccio の見たる伝が出て之は史的価値はヴヰラニーからも材料を借り伝説的のものを加へて文学的にダンテを描写するを主とした。つまりヴヰラニーが史的で、ボッカチオが文学的であつて此両伝がオーソリチーとなつて其の後伝を書く者は殆ど皆ボッカチオに依頼して居り、或は之を増補したりするけれども、全体の史的事実が得られたのは依然ヴヰラニー、ボッカチオの範囲



を出なかつた。然るに十八世紀末に於て不完全な伝であつたが、之までをダンテ伝の旧式時代と云ふべく、十九世紀に入つてから Cesare Balbo 等の如き人の伝が Dionisi [illegible] を本として [illegible] 宝なるを凌駕して完全な伝を作り上げる [illegible] 之を [illegible] 時代 Period の [illegible] と呼ばれて [illegible] を王に十九世紀の終りから厳密な史的研究が起つて来て殊に大陸の研究がさういふ風になつて来て大事人はボッカチオに来ての是非や不確の材料でダンテを [illegible] 批判する [illegible] 方を保けて精確な史料と [illegible]

は唯彼の作ったものを作ったものとして解釈する
に止めるといふ風にして行く仕方で Positive からも
negative にも得ばかりで研究法で在来の作りもの推定を
壊して行くといふ意味である。例へば
Carl Witte の "Dante Forschungen" (Dante Research) の部分のやう
であるか J. A. Scartazzini の英訳 "A Companion to
Dante" でやさしかけ其網好例で此方面に縦横に過ぎる
のダンテ研究入手一には最好参考書の一である。

其他には

A Shadow of Dante — Miss Rossetti.

Introduction to the Study of Dante



— A. Symonds.

Dante his time and his Works — A. J. Butler.

Carlyle. 'Dante' in "Heroes and Hero Worship"

Church. 'Dante' in "Essays"

Texts edited by Moore

ダンテ伝

Dante Alighieri 法律家の子、フローレンス生、1265 五月生、九歳にて

Beatrice を見染め之が一生の詩霊の源で又 ~~憂~~ 生涯であつて、1290

二十四歳の時死んだ 又之を 結婚し之が妻は寧ろ家庭不
(後略) 和なりしか

事との関係は不幸らしかつて 1289 ある時は戦争にも参

加して捕虜となつた、1300 枢要の役をして ~~[illegible]~~ 又外交

にも使臣となつたらしく其頃フローレンスの政争 Ghibellini 二派の二十二年だけ

二ケ月にして止めた 当時例の Guelph と 教和党と返(?)党との

事で ダンテは 教和党に味方して居て 1301 ローマに使して

トルストイ

とかくフランチと干のつけ帰とずなんで里を去ぎりて老い勝ちて
かくて其追放せられて其1302の年世紀を播して火刑を
許すとの裁判がありて　ダンテは其ら Verona や Lucca や Urbino
附近やら民ところしいパリーまでも來ること言はれず終は Ravenna や
こ於て　ラヴェンナで ~~[illegible]~~ Romagna や 其地で
1321年九月十四日に死んだ子せしあるから十六世紀に四旅が絶え
ことと言はれる。画形は亡骸から取ったもので旧です。神曲は
1314から1321までにあったと言はれる此際には早くからもあったので
あらう

# トルストイ研究材料

"Ideals and Realities in Russian Literature"

by Kropotkin

(1) ロシア語は Turgueneff が死に臨んで言つて居る如く完全自在な語である事を保証して居るが、このロシア語は Great Russian 又は Russian は free from patois (dialect) で北、中央、東、南のロシアの人の話す（極北 Caucasia 及 Siberia）語るが、Little Russian 又 (Ukrainian は之れとはみづから違つて居る言葉、又 White Russian は西ロシアの一部で用ひて居るもの)

遊牧の Pushkin, Gogol, Turgeneff の文章等の用ゐる文字
語は即ち Great Russian で、此等の大家の品に運ばれて甚だ美しい。
全集の何万何十万といふ數が年々刷られて四部に売れて行つてる。

---

"The Empire of the Tsars" by Anatole Leroy-Beaulieu

(二) ロシアの土地は欧と亜とに全く Continental で、水平の切れ目が全く、山が全く従って峡なども無く
寒と夏暑との両極端を示して居る。又日照の甚しい寒暑の差にも耐へ得ぬ



(3) 土地の性質的一様なる所から国民的統一の容易な所で世界中至れり
此の点に便宜なる国である。Russia 全土を統一して統一的に出来たる
(4) 此の国は平らである。ロシアは土地の豊饒さとで一地方に非常に
良く又どんどん他の地方はこれに比して稀薄である。Moscow
附近とか Poland 地方とかは此豊饒の方である。
(5) ロシアは一方に二世紀末の欧的植民地で一方に一千年の古いアジア
国民である。アメリカとトルコの両面を見せて居る古国時の様な国民
である。之が直ちに国民性の根本を成す所以である。此 Duality
なる事が最も而して両面が此に附けて現はる。
(6) ロシアの人種は Russ と Tartar と Slav とから成立して居る

(4)

Finn は Ural-Altai で ~~雑種~~ 一種の Mongolian であり
(Slav が主であるが) Tartar は Mongolian で劣等と述べてゐる。
Slave は Celt や Latin などと肌を同じうする (Aryan 種族) 民族で欧州の文化
と同じである。

(7) Slav は地球上欧文明に於て最後の花を開かんとする
グリークローマの文明と離れて新根拠から文明を打ち立てんとする
民である、
Greece に於て起った所が、近世文明の端となる
Galileo (十六世紀) の地動説は Copernik (ポーランド人) (十五世紀) によって先鞭をつけられ Luther の宗教革命は ~~Huss~~
Huss (ボヘミア人) によって先鞭をなされ、已に六種の新潮を前にしつつある。

(5)

欧州の文明は此人種によって改革せらるるであらうか欧州目下の問題で
あらう。

(8) トルストイ 評伝 傑作 N. I. Dole が 1904年に出した全集
翻訳 Mercy Dole で出版されて居る (1906年) Wiener's Count
Tolstoi's Latest Works & Life (1905) C. T. Turner の Count
Tolstoi as Novelist and Thinker (1888) Kundson's Leo Tolstoi
(1904) Birukoff の Early Life of Leo Tolstoi, Bchi's
"Recollections of Tolstoi" (Eng. trans.)

E. Brit.

(9) 以上の地方自治機関の形をなしたのは Zemstvo で、会の
ようやく[illegible]分離し、実は他に統制を[illegible]、其他
其下には村会や其他[illegible]は中央[illegible]市町村のもあれども同じく
政府の官公吏一部は Tsar の下に the Committee of Ministers と
the Council of the Empire と the Senate と the Holy Synod と有り
[illegible] Council は行政顧問、Senate は[illegible]
の機関、何れも帝の任命、Synod は宗教上の事を
監督する。



(Tsar は Bishop を任命するので至上権は Tsar にあり head [illegible] Synod 監督)

(10) 露国の宗教は人種の[illegible]のみならず[illegible] Greek の Orthodox が
最も多く Roman Catholic も多し。其他 Protestant も
Jews も Mohammedans も Buddhists も有り[illegible]して
[illegible]まず信仰の自由を何れにも[illegible]意味あり

(11) 11の学者は日本と同じで七大学あり其中に Gymnasium ( ) と
Realschule ( ) と[illegible]、[illegible]学の統計では大学生が一万[illegible]
二十八人農民の子から[illegible]これ等は教師の子[illegible]
乙等、学校外の子等の[illegible]に[illegible]学[illegible]の
研究には種々の制限がつけてある。之 学者の育も高等が
色々の不都合[illegible]ながら之は一層[illegible]

(8)

な制限が加へられ[減]るべく Christianたる者の外を悉く
よつて来られてある、大ていの者は押へつける方針である。

(12) 人種は露西亜 Russians の外 Cossacks Finns Mongolians, Jews Germans
もあれど重なるは Russians が主で、之は Great Little White の
三つに分かれ、大ロシア人は中央より北にかけて大なる部分であり
小ロシア人 (Little Russians 又は Ruthenians) は南方
にロシアの西を占めて居る Muscovite とちがつて [illegible] のつゞから
其の中心ともなつてゐし白ロシア人は西方にて比較的小
部分である、

(White-Russians)

(9)

"Empire of Tsar" 只

(13) Little Russia と White Russia が十七世紀迄 Poland 其他の国
に服せられて西比[illegible]と Great Russia との連[illegible]に成つて居る。

(10)

(十四) ロシアの人種に就て序に云って置けば ~~[illegible]~~ 其は Slav 之は Aryan である。Finns 之は ~~[illegible]~~ Ural Altaic Mongolian であり Tartar は Mongolian である。之等の混合である。

(十五) 是まで前篇に言ったごとくにロシアの文風は東西二者の混合でありますが今でも彼時の文明(西方)が欧の弟子であるかないかの議論であるかに就ては両説ある。一は Occidentalists と呼ばれ 一は Slavophils と呼ばれて、互に主張して下らない。前者は欧州の文明を又幼稚なるものとして荒廃[illegible]欧州のものになると云ふ。

(十五) 注目すべきはかゝる国の Slavophiles で其の主張は一種の
粋論に外ならなかつた伝統の文明を維持せんとするのであつて
併し十九世紀に入るまでつた欧西文明を経た後の文明に
既に其の輸入で其の結果はあつて、而して十九世紀の中葉
に及んで国民的意識の発展の膨張から覚醒して
見るとそれまで有難がつたと思はなかつた学問も法律も
又も一切の文明が少しも自分等の幸福を増してはゐないへ
却つて益々窮境に陥つて居るのを見て始めて目が醒めて
我等の凡ての文明形式を呪咀するやうになつて来たのである
一面はやがて本来のロシアが既存を呪咀する形となつて
あらゆる権威や善美して異つたものを呪ふに至つて来
それの一価値が無くなつて来た。之ぞ所謂



Nihilism の由つて起つた所以である。されば Nihilism
は実に Protest of Russia against Europe で
あり tragic emancipation of the Russian con-
sciousness である。

(十六) ロシアの人民は Nobles, Burghers (町人) (Townsman)
Serfs, 農民 (Peasant), Priest の四階であつて、政権は
privileged と non-privileged の二
皇帝の許する所の者即ち privileged
階で、前者は大抵貴族と僧族、及市民中の或者
(兵役除外・納税免除・體刑免除等)
のみであつて其等のものが各々の特権を與へられる。民
之別は近来殆ど無くなつて

又此は我が英に例の二段で[illegible]及日すると利なかつた
いふせられる貴族が personal と hereditary とに分かれ
僧が priesthood と monkhood とに分かれ 市民が notables と
mechanics and small people とに分かれ 農民が private land
のと crown land のとに分かれるといふ様である
而して貴族は昔からのが残って居るのは僅
に世襲が[illegible] 六十万、一代が三十五万とて
皆ら数[illegible]なって居るのみならず、[illegible]其事で
話せてある。[illegible]と了やれ[illegible]出来ない。

(12)

又百姓は例の議論で云ふ近三十年来のに武人
公でもある、先年佐で使せられたにこアの現代の生存
の貴族は他私人の家柄を買つて百姓を禁じ出て
heroine とした。[illegible] の sublime の中に the
civilized men, we are nothing but old
rags; but the people — oh, the people
is great ] といふ言がある

(十七) ロシアでは昔戦争の時捕虜とか罪人とか浪人
とかが他の人の為に土地を耕しなどする奴隷や

のものであつてこれを muzik 又は ~~[illegible]~~ (half men)
と呼んで之に対して農奴 (を muzi (full men)
といつて居た階級が今日の百姓となつたので
十六世紀の末あたりから一層酷な状態になつて
来た。これは偽帝に Theodor a son of Ivan the
Terrible の代に其親父 Godunov の改革で甚だ南
方での大残虐には殺を致して兵士を募る用意に小
作人が逃げてシベリア西北の深林へ逃げて
それらの者が困つて之を引留めるため其附属の土地

(13)

から離れて他所へ行く事を禁じて居る大地の附属物
て地主の目的である子のやうにしてしまつた これが Serfdom
の始りである 而して彼等の農民の事と共に
Serfdom 制度の時代に盛になつて Alexander
二世の末頃から ~~[illegible]~~ 遂に ~~[illegible]~~
Serfdom 廃止 [illegible] が 1861 年に発表せられ
が之は今年で約 [illegible] によつて [illegible] のる
完成しなかつたし 其他は昔のやうな Serfdom
はなくなつたが

(十八) 又ロシアの婦人の地位は極めて卑いものであつたが然し近年個人主義の普及の為めに女子も段々解放せられかけて来た。

① ロシア史要

Russia と云ふ名の起原説は種々あるが普通には北欧の（紀元九世紀前にロシアの）
移住せし側の アイスランドの Vikings の一部族で
Russia となつたものであらうと云ふ、九世紀頃になつて Scandinavia
人で Rurik、Sineus、Truvor と云ふ三人の兄弟の勇者が来て Novgorod
に居住して始めて Slav の歴史を開いて、而して遂に Rurik から
一人だけ残つて居つた子の Igor の代には段々勢力が拡がつて [illegible]
~~[illegible]~~ なほ今日 [illegible] めぐつた中心部にいた 又

Constantine を都として此処にビザンチン文を興さしめ、
之が十世紀の中頃の事である。十二世紀に至て Greece が皆
其部となり、
十四五年頃の諸屋ロシアが其配下になつて、之が凡そ 1462
又は紀人ロシアが其の力を得て Greece 教
此の基礎をたてて種々の変遷があつて、直ちに其上に
この僧侶の僧侶等もあつて、遂に十七世紀の
十八世紀の初から Peter the Great の代となり
明るくなつた

やや文学史的、
ロシアの上流の中でも民謡、伝説、昔話などを思ふて古代
のもの、佛のものは残つて居るが中には既に多くの作
Bylina とて Saga のやうなもの Epic も多数
この伝説は多くは成りたる。近き年代のものは簡
内十二世紀頃のことを Lay of Igor's Raid と云ふ
私が此王の事を述べたもので此の Nibelungen Lied
のやうなものである。 Russian Literature
(3) Earliest Period to the Present Time

といふ)

蒙古人に征服せられての無い后に種々書の出版（宗教）

の自由がなかつたので思想もついてこない又一方には凡てが宗教

に隠れて蒸汽し業務の自由を奪はれてゐた、

十八世紀の文学は例のPeter大帝が古代のSlavの字を新案して了解

ので新しく割したのである。

併し十八世紀のロシア文学は大体に於いて仏の模倣に過ぎ Classicism

であつて、ただ見るべきは晩年に於いてDerzhavin (1743–1816)

の詩とFonvizin (1745–1792)の喜劇！

Novikoff (1744–1818)の作家(死この) Radishchef (1749–1802)

(3)

の散文運筆で国民文学の基礎をなし言語の上に功がある。

殊に詩の方面では思想上に自由主義の本として残

継者であつて、本に十九世紀に於いて Karamzin

(1766–1826) Zhukovsky (1783–1852)は史家として

History of the Russian Stateで国民の読、Poor Liza として

小説でSentimentalismに於いてSentimentalな不自事を説いて、

Romanticism詩人であり英の西英の詩人の

作品を翻訳し詩は専ら人に依つて作の

作家の基とし只自由と国の人

例のであつて自由の方から来たのはDecembrists

(4)

ロシア文学史の続

此のロシア文学史の於ては Pushkin に至つて起きる序急の為めに

先づ大系統を與へて細かきは他の書物の部分に譲る

(1) Pushkin (1799–1837) African blood, 露帝のために（詩も小説もある）

決闘で死す, Byronism, Emancipator of Russian Literature (Brandes)

Russian Impressionism, Wordsworthian 自然詩人（小説では[illegible]の元祖） Literary

language の決定に大功あり、[illegible]

(2) Lermontoff (1814–1841) プーシキンと常に比較評釈せら

れる人、彼も軍人を以て決闘を挑まれて死んだ、第一

Shelleyism, Musical の極, Demonism, Pessimism

と新たに1825の十二月に[illegible]のために一味に[illegible]

（[illegible]の軍人[illegible]に於いて）

[illegible]詩人で惜しむべき人[illegible]に殺された

Ryleeff (1795–1826)

[illegible] Pushkin に[illegible]

十八世紀の前までは史家の Tatischeff (1686–1750) 又 Lomonosoff (1712–1765)

は詩人で文字で（文法）露語の発達に力ある人, Sumarokoff

(1717–1777) は仏風の戯曲家 Trediakovsky (1703–1769)

は詩人として露語に力あり

(5)

(3) Kryloff (1768–1844) Dmitrieff (1760–1837) 二子は
fable の作者として民謡の創定に効あり
以上は総て千八百四十年頃以前の文学で露文学劇の祖
七の効あり（一々の重なものです）而して真直の本位に
立つ人が出て来たのは四十年代以後です

(4) Gogol (1809–1852) は Little Russian で Great Russian の語で書いて
野西田舎性の特色ある人、けれども其の私意文学から脱ます humour
的の果報に涙あり、小説と戯曲 the Inspector General (1835) の戯曲
と Dead Souls (1842) の小説とが代表的、劇と小説に於て新紀元を

(6)

開く。ゴーゴリは thinker but artist, pure realistic artist, 露西亜 realism の祖はゴーゴリ
キエかゴーゴリかとは人のよく論ずる所である。
晩年自己の作を非要として其の神秘的な狂
となり遂に悶死す。然であって、蓋し彼の Dead Souls の中から
彼の Self-love を眺めしめて其他に絶望の念を生ずるは論ぜかし
ての生活の道路をも蔽って。
Russian realism は Gogolism であり、唯物的両界にかかるので
ある（Gogolism の意）

(5) Turgenieff (1818–1883) に至って之を世界的

⑦

なさしめたアス、十九世紀最大の文豪の一人、 sense of beautiful 其に
非常な高深な intellectual contents を有して加之婦人
の力を欠けておりながら男子二十年目に思想的の最
も健全な時代ではるのヒーローを彼は描いて精彩を極め
た、老時の新しき時代の思潮を深みある人生を描く筆
意も且明りから実現をした状態は既存に野心をか
であって。つまり Turgenev の描写法であって、彼の見方は殆ど絶望
何でも絶対的で gentle touch of loving friend であって、
彼の言った説は Russian Rudin / Liza の

⑧

には Fathers and Sons / Smoke / Virgin Soil で非
経験的す…、彼の Russian landscape の叙景は早く
紀元のたもとて略く

(6) Tolstoy / 本文則あり、

(7) Goncharov /

(8) Dostoevsky (如く如き) 病的心理の人生観、
狂暴・陰鬱の人を描いて居民安定を攪乱して甚大の感
録を記しぬ、二十年初めて所の国語的に動作せ
当時トルストイ、ツルゲーネフを除くと一時の作家

現象、否定の地歩はまうでなし、Sensational で terrible で
不自然な陥る所あり造作的の作風

(9) Nekrasov (1821—) 詩人
時代に芸術は drama のことと Journalists のことなき
Journalists と雇主にはお相手なく Gorky
など盛ん入れた、(其芸術の部) 社会評論などの事に移り流りに
現代の風紀は[illegible]んで

(10) Oertel (1855—) Korolenko (1853)
Merezhkovsky (1866) Tchekoff (1860-1904)



Boborykin (1836) Potapenko (1856) 其他種々の
小説、事として出来し後記に Artsybashev などがあって来て、
事として日本の思想界は急に[illegible]真のやうに重視して
ニつ厭じて引つ返りて劇化ふせずるとせよ

(11)

トルストイ著作を
翻訳（英文）
[illegible] の巻本の表による

附録 翻訳者

訳者として信用すべき人々には Tchertkoff, Fifield,
Maude 等の名を挙げて居るが就中チェルトコフ、モード等は
自ら訳文を見ながら訳して居る彼の許者では Dole,
Hapgood なども尤なる名である、
出版者としては Free Age Press 〔 London の [illegible]

本や Maude 千作の Grant Richards, London. や Scott, London
や Crowell, New York や Heinemann, London 其他出
ある。

評伝

Recollections of Count Tolstoy — Behrs.

Leo Tolstoy, His Life and Works — Sergeyenko

Tolstoy, His Life and Works — Kenworthy.

Tolstoy and his Problems — Aylmer Maude.

トルストイの Childhood, Boyhood and Youth の評

けするとは自伝の少時の伝の材料に用いられ伝あとする
評は少ない

伝の材料としながら其内から主人公すなはちトルストイに
当る人物の性格を画すに strong passionate (十誌)
sentimental としての Tolstoy である。ニヮー見ければ伝の
自伝の一部 とみえて 観念なるものは何人も否まぬ
作としての評は [illegible] みなり傑は此者を realism とよ
一語で掩ひ ~~[illegible]~~ トルストイは之を来る時の回想す

⑦

る非常な力を要するとし けれども終は全く山ではなか
やうまでも自他共にある詩人として全部の
中では特に主義を求めて居たとしても
自ら青年期は特に ideal ではあるが甚だ ideal な Purity の傾
様のものが作品にあれを具現してゐるやうにもの
ようなもの、あらゆる世界を見せる力に於て詩を深くまとめ
るのが青年に対する好い所であると
又 ~~[illegible]~~ は立派な資料として扱っては居るが中で
女の死を描いて詩を材に描写の上から realism の凄い深さの
やうとして完成してゐる、

千本松にけれども詩人の感は遂に realism の fresh な感じが接
したとも思ふ 然しであるが深さに於ては彼の作を断じて大作
とは言ふことを満足し得なかつた、むしろ自分は思ひ出
全部の様な素直な素朴な少年の天地が無意識に
謹んで描かれてゐる点だけの満足で、深さは未熟な観念
みなれてもなる 気味である それが非常に未熟であつて
人様その方が強くなつて描写の興味が少なくなつて居る、
トルストイの晩年の作品は実に早く完成してゐると云ふ説
は死と思ふ、又少年の心になつてゐると云ふ中には余りに老熟
壮年になり過ぎて居るかならないではなからうか

①

Count Leo Nikolaievitch Tolstoi

トルストイ伯爵 (Nelson) 1828 2 Yasnaya Poliana 2生れ 1851年 2

Caucasus 2 行て兵営生活を経験しで Childhood 及び the Cossacks を

計画し、後ち Crimea 戦中で Sevastopol を守りて Sebastopol の話

城を守り St. Petersburg 2 帰り 新著に興振せらるゝ時に丸て Turgenief 2

逢つてけれども あまり親しくはなく仲つて書翰もあつく、けんざう

が死ぬ時に始めて彼の深い好感を払つたと云ふ。1857 の末か 外国へ

業学するに至る 1863 2 War and Peace を始めた 1865 — 1875

の Russian Society を描き大名を得た 1871 2 Anna Karenina

④

というふところが感じした少年記である、即ち

自然なる描写は前の方によいのがある、後の方は

よるべく[illegible]判らぬ[illegible]思える、

全体に fresh な solid な cool な感じを起こす[illegible]

見える方である。

(2)

[illegible] mental experience を[illegible] 1880年[illegible]

の本 My Confession が[illegible] 1901年[illegible] Holy Synod より[illegible]

[illegible] socialistic [illegible] 1885年[illegible]

My religion が出[illegible] 1889年 Kreutzer Sonata が[illegible] 1895年[illegible]

[illegible] Resurrection"

"The Kingdom of God is within you" "Master and Man" "Ivan Ilyitch" "What is Religion" "The End of the Age" [illegible]

[illegible] Want of Philosophical Sanity [illegible]

[illegible] realistic, interesting, didactic [illegible]

(3)

Tolstoy as Novelist and Thinker — C. E. Turner

Tolstoi as Man and Artist — Merejikowski.

Impressions of Russia — Brandes.

Leo Tolstoi — Birukoff

Leo Tolstoi — Knowlson,

Ideals and Realities in Russian Literature — Kropotkin,

(1)

# Shelley

Percy Bysshe Shelley は1792年八月四日 Sussex の田舎で生れた

父は善良な家の地主であって 十八で Oxford 大学に入って、当時流行

小説の作があって 其の出版費などの金を費したりして 彼

の中学時代からの傾向は非常の感情家で Radicalism で在った Shelley

Shelley を Atheist とも呼ばれ Godwin 等の社会主義政治論 (後に岳父となる)

Hume 等の物質論 マテリアリズム に感化せられて、当時の風代ら

一生の彼の思想を支配した 大学に入って翌年 彼は友人等にこれを

送って非基督教的論説を集めて The Necessity of Atheism

と題する小冊子を出版して大学の主信に逆つて放校となつて
遂に之を推せられ学問せられたが屈伏しなかつて方向に帰へぬと了解で
友人Hoggと共に退学せられた。帰つて家へ(の)不和かつてお(家の)後從妹は早々
に Harriet と同居して、其中に妹の友達で Harriet Westbrook と云ふ
十六歳の娘と近づきになつて之は本気の恋をして人の娘である、十六歳の娘がシェリー
を切害して之を理解して結婚させて、それが同じ十九の歳で娘は十六である
母エディンバラに出奔して之を迎び結婚したが是は一生の不幸の本であつて
其後 アイルランド、スコットランド、イングランドとをさまよひ困窮して而ては
彼女の家庭は面白くなくなる其中子供は既生れる。遂に妻は嘩嘩して
家出をしてシェリーはロンドンを時々帰つて来て、しかして帰らない生活の中に
哲学者の娘 Mary と恋愛するに至り、手を携へて大陸



遂に之と奔したのが1814年である、それと帰つて1816年再び大陸に遊び
帰ると其年の暮に先妻ハリエットはロンドンの公園の池に身を投げて死
んで了ひてメーリーとシェリーは正式の結婚をした。世の人は彼は愛の
死によつて遺産を継ぎ、ハリエットの遺産は十分に維持しれたと称せられる 十八
十八年に三たび大陸に渡り(英国を去り)、死ぬまでの追放者の如く
伊太利に住んで彼が本当の生活をおくつて別れになつて其まで死んだ、伊太利で
は当時同じく英国を見捨てて来て居たバイロンと近づきになり、海岸の
Lerici で バイロンの居る Leghorn に往つて 彼の画家の Leigh
(Shelley Hunt 雑誌の共同発行のため)
の帰りに 嵐に遇ひ死んだ 死骸の岸に浮かぶ
1822年の七月十九日の航であつて、之を年三十とす、彼の詩歌は and
Shelley は delicate で sensitive で

(4)

[illegible]であって、彼れの事業に照して、彼の人格と詩とを対照する
（書評の）批評の様子がアリ〳〵と見えて甚だ便利であるから引く
(Main Currents Vol.4 P.207-8)

(5)

Shelleyの集は有名な Rossetti 氏の Complete Works が一番で
伝集としては公[illegible] Rossetti のと Dowden のと Rossetti [illegible]
のとが有名である。[illegible] 伝としては Dowden
の歴史で載つてゐるのが最も精しくして且面白いと
せられる。
シエレーは英国の詩人中でも最も[illegible]の二人[illegible]
るが、(1)之を詩風、(2)内容の詩自然的[illegible]、(3)内容の
詩人的[illegible]の三点から見て見る。
シエレーの詩風は最も評拝の困難なもの一と称せられる、
内外[illegible]繊妙に調和して[illegible]
[illegible]故

6

trivial な ~~[illegible]~~ fanciful な、sweet な elegant な

詩があって、上品に美しく温和かく

優しく天人のやうな風格を持って居る詩である。（纖巧な）幸に一味

超越的な風格を見して ~~[illegible]~~ 世界

に浮世離れて居るやうな フワリとした詩がある 同じ（瀟灑な）

（風格し）自然を歌ふたもブライアントが言ふて居る自然の理想を現はすよりも

むしろ其の element を選んで歌ふ意味がある先、木、風、雲、土と火

[illegible]ものを歌って其の中の[illegible]あの者を歌はぬ草花的

~~[illegible]~~ 有味が出て来る（文を直ちに霊的で[illegible]）上品になる[illegible]でなくなる、此の主味が

言っぱシェリーは 思想[illegible]的でも（理想的霊的精神的）でも 何でもなくして

7

超越的、理想的 ~~[illegible]~~ 霊的である

~~[illegible]~~ 彼れは sing するけれども describe しない Spirit 又は soul を

直ちに交接するけれども形ちは迄きを写さぬ、此の精霊主義

理想主義はセーンツベリー氏が（英国評論史で）いへる如く Plato の主義にでもある理想

の主張は彼の彼れの有名な Defence of Poetry（1821年

友人 Peacock の Four Ages of Poetry に対して答弁を試みたもの）

に見えて居る、彼は詩を定義して the very image of life

expressed in its eternal truth. と云ひ something divine と云ひ

centre and circumference of knowledge と云ひ perfect and con-

summate surface and blossom all things とし the record of the best and happiest moments of the happiest and best minds といつて居る、要するに宇宙人生の精髄を詩で書とらうとしたに帰する。彼の作は此思想をよく実行して居る。試みに下に其一二の例を挙げると The Cloud と題する歌の首尾二節（此歌の意味は



Shelley が詩の自然を叙しても人事を叙しても aerial である spiritual であるとの例を挙げんに（Nature と云ふ人の Popular Studies of Literature に Wordsworth を naturalist、Shelley を idealist と云ふ風に分類し 後者を imaginative で idealistic である 彼の詩は airy fairy form 又は airy fairy meaning ということである 面白い言葉だ）例へば其の有名な短篇 The Cloud こう見るに其の自然を叙する方式が甚だ奇警である 雲が自動作に雨露を持来る（生きて居る）訳なもので愉快な 的な声調を味ふであらうが、段々言ひ進むと共に神秘的空想的に

(10)

なつて悲観厭世的なかたちになつて行く
其結末の有名な一節 I [illegible] を [illegible]の事のあつたから[illegible]
併し之等はShelleyの詩では例外なまでに見るべきものである
る、(Aik. P. 5[illegible]3) 此には[illegible]の
彼がPisaの尼寺で如めし逢つた Emilia Viviani と云ふ女
話みつまらぬ女と結婚して[illegible]早く死んだが此婦人をShelley
は一生の理想的美人として之に[illegible]をささげて居る Dante
の Beatrice に於けるが如くである 其の Epipsychidion は此婦人
を詠ずるもので序にもそれとなく述べて他人の詩にしてある
ダンテの Vita Nuova に比してある。其如の事に(Aik. P. 406)

(11)

(テニソンの歌を愛して其訳の一首を評すべし)

I sink, I tremble 云々と切なる恋を以て終る
て其が終つてからしかも於て抽象的に超越的になつて[illegible]
も我脱出せんとする(P. 414〜415) And we will
から We shall become one から One hope 云々に到っては
熱烈な情も全く消えて抽象的になり超脱的になるや)
(此は Alastor と Adonais 新なるは極端な厭世的寓言の
例、其結論は厭世的、併し結局は Adonais の結末
が彼の信念を示して又詩の[illegible])

(12)

Alastor 又は spirit of solitude は Shelley の詩中で最も空な
綿なるを称せられる。全篇凡て霊妙な夢幻の世界やうで而して
其中の風景が殆ど凡て宇宙的模糊的である。一篇の趣旨は其名
の示すが如く アラスター即人を苦める怪物であって孤独の霊である。
如く我等には殆ど意識で直解せられず眼前に種々の不可解を
ばえるが如く我々の心を悩めるものとはならず。こんなものを見ても
我は孤独で苦められたる詩人は世俗的の悲しみの解し
がたいものできたる絶望の信念を強くしたのである。然の初代
Shelley で自分で宇宙をわかる実在を解決して Love で最後の
解脱を得るといふことを示して詩をしてゐる

若しある美しい娘は終に…十八の時の作で言はゞ
人生の真実にふれしと触れなかつた時の生存であるが此アミエルには
至つて（十八年の作）彼は肺病で死する迄は苦抑なる彼の
終始にも回宙害不幸に包まれて逝しい人生の総結を厳判
した其の苦い自己の息吹の声がけ詩となつたのであるそれは詩の
後に純粋なる本も人が加へた詩で何でも守つて来た人々は此詩を以て最
もすぐれた作品を選び揮したものと言つてゐる併し一般の読者
には読んで面白い詩ではない研究の郵しては重要の詩である
が面白い詩ではない美し全編生存で現実を担絶して而
学者である純生存の例としては他に数の



少なくともである、彼女は一般人が（紛れ）世の普通なvisionで打ちされても
与へる此の真理を発見せしと称した、アゼン、ゼリユサレムの丘を
思びアラビヤ、ペルシヤとさまよふて、或時は夢に不思議
の美女と真理を語り或は明月の下にコーカサス山上の奇跡を見
或時は何を行り君に入り風の（響）荒寥の音に
神秘の声を求めて遂に遂ひて死ぬまで秋を満足
せしめられず、
Bas despair and cold tranquility
言ふところの語末の死望の絶頂を示すのである。此詩は何すと云へ
りまりて例ありとを得ぬ全編生霊な月の光のやうな詩で

(15)

Shelleyが自然に対する地位はBlakeも言って居る如く人君に

書を求めて得ず自然に之を求めたと云ふ形跡になって居る式

点は寧ろ恩寵と同じである。其に人君に必然人君は書幅を

つかって自然に甚熱書を捧げる気味である。西洋[illegible]

本来はむしろ人君[illegible]を大半とする詩人であらう

例へば彼らまでせしと其指がする前の詩Queen [illegible]の[illegible]

全篇人君をなすとしたるも人君を改善せん人君の理想

とすべきとふ觀念である。それはしの[illegible]かうし

How wonderful is Death
Death and his brother Sleep!

(10)

なつて~~[illegible]~~ 此處因縁せあ[illegible]の中に[illegible]

（因に Shelleyの[illegible]の終つて其の[illegible]の信仰の了悟の前の手を引いて[illegible]佳句の例として中段の一節を引く）

16

ともなひてある、又其天才神を作て人の目位つ訳も人又を
れはとしたものは外ならぬ所のから彼の Necessity of
Atheism のうち甚だ一言をここに引くは信ずるが其擁護は彼
が Queen Mab の前緒言註に於て Nature の中に何も依て即
Nature の中に Nature なる God といふ言を最も好いて其例で
ある、甚だ此神は Belief なるものから見て Belief の性質
を攻撃するのは一の [illegible] Passion であって Passion の外と
たるものは [illegible] excitement である excitement の
凡て三つある Sense からまわると decision が mind 即ち経
験の推理からまわると experience of others 即ちとある之

17

第三是迄の神の定義は Proof を有するから直覺何ものからでて
も其 Creative な God とてもあるまいが存在は之を以て知れぬ God
が an hypothesis [illegible] God は such a Gods
が need of Proof と云ふに帰する、之は太しこもので仕舞ひかと見
吉郊めぐりに此等の学者内助能所助ては信に異味を見
して其心をとてを以て発せらる、彼の自然の詩の最好例
は三絶節即ち前に引いて Ode to the West Wind の外に Ode to
West Wind は Shelley (Florence 人の前者) が フロレンスで (1819) 何時も書いた部
外を散歩してると秋も老の風の吹きたに吹き雨雲の哀しい
れがおまへにつれて落葉がはらはらとして行くのを見てうつくしく感慨

(18)

とらへ難くして強つさ詩である。詩中に風雨つよく[illegible]をさくすると称せられる詩で英詩中では至数の大作と称せられるものである。尚して此[illegible]の作を読んでも強るは自然と自己を忘れさせる点で主観的である。自分を離れるその如来の詩人であつて、此点ではむしろバイロンなどと大擬する。然るに時代の子である[illegible]代前のワーヅワースの畢に比べると、遙かにワーヅワースには自然を自然に大にして見る傾があつて、即ち自分を自然の一つの小さき者として謙して強る。シェレーは自然を自分の方へ引寄せて自分のかまけて強る。ワーヅワースとセレーの自然を取扱ふ方式の異なる所以である。西風の賦では彼れは其風と[illegible]一体となつて自分の制し難い情を[illegible]にせんと努めて、これは絶[illegible]の[illegible]

(19)

い方の例を見ずんのでできない。同じ爆烈しい例で Byron のと遙かに比較である。[illegible]の主観とセレーの人格のやうな主観と異なる所には此詩とバイロンのチャイルドハロルドなどと比しよく見える。又 Shelley の詩は 1820 年 Pisa で Cloud をまいて[illegible]同じ[illegible]或ひは[illegible]の中を[illegible]此の[illegible]に出て雲雀の[illegible]を[illegible]と[illegible]て[illegible]である。此の詩一[illegible]も Shelley は不朽なるものと或評家(Rossetti)は[illegible]詩である。[illegible]も雲雀よ我も地の如く[illegible]である[illegible]何の[illegible]高く飛[illegible]

一 この西洋の詩 [illegible]
は Shelley の静かなる情を寫 [illegible]
を比較すれば材料の如き 西風の賦 [illegible]

If I were a dead leaf thou mightest bear;
If I were a swift cloud to fly with thee;

Oh lift me as a wave, a leaf, a cloud!
I fall upon the thorns of life! I bleed!

Make me thy lyre, even as the forest is:
What if my leaves are falling like its
~~[illegible]~~ own!

The tumult of thy mighty harmonies
Will take from both a deep, autumnal tone,
Sweet though in sadness. ——

2 雲雀の中にも

We look before and after,
And pine for what is not:
Our sincerest laughter
With some pain is fraught;
Our sweetest songs are those that tell
of saddest thought.

Teach me half the gladness
That thy brain must know,
Such harmonious madness
From my lips would flow,
The world should listen then, as I am
listening now.

要するに愛氏を説けば自然である。強い我の発現は此期文学の根本である。彼等詩人の生涯の悲劇も此点から来たものに外ならぬ。



殊に彼れShelleyの詩に見る観であるが、(乃至宇宙) 此の世界を言つて見ると之を神詩として考へて ~~宇宙全体の神を生むもの~~ 考へる方面神明にあらゆるものを望まるものと見て、地に於てはSpiritがあり此に於てはSpirit讃がある。併し同時に彼れは[illegible]方面は [illegible] ~~解決~~ ~~詩~~ は人間に詩とは一の解決を利にしたる所の解ふ、Loveの一字である。宇宙は詩でLoveと云ふ意味であるから両性の愛と限つて居るではない。而して其の愛の解決を充たしたものに訴へるのがPrometheus Unbound Epipsychidionの詩である。此の詩は[illegible]戯曲詩であつて、其他難解な詩で

なものであるが、1819年伊太利に於て Caracallaの浴場の廃墟で書いた有名な詩で也有らる Shelleyはこれを呼んで名付けて抒情劇と称せらる、希臘の神話に於て一種空想の世界を描き出した。其の劇的構成を用ゐてゐるが、物語は四幕に分けて加へたのPrometheusが土人形を作つて天の火をぬすつて其れに加へたので「ゼウス」が怒りで其の罪でCaucasusに縛し猛鷲をして其肝臓を啄ばましめ夜の間には又も元の如くに生えて来るのを Heraclesが鷲を射て縛を解いてやる神話に基づいたものである。第一幕は印度コーカサス山の氷の谷の一巌角にプロメテウスが縛られ



てゐて地上の[illegible]代表[illegible] 水のこめた[illegible]のAsia其他が取り巻いてゐるのて嘆く、其れに天の使が降りて来てプロメテウスを責め罵るなどの事があり第二幕が[illegible] のAsiaが[illegible]で[illegible]Asiaを代表しDemo-gorgonに[illegible]Loveの為にプロメテウスの縛を解 大嶺里に住む かんことを乞ふ、デモゴルゴン之を許して先づくるもち此の夜の大暗黒の中から虹の翼ある駒が風を御して車を引かる 其は小さき、此車が時を現はしてゐる、解決の時は到来してデモゴルゴンも[illegible] Asia等も乗って天に上る

第三幕は天の場にして Jupiter が麾下の神々を集めて Rejoice!
Henceforth I am omnipotent ただ soul of man が不屈の
火を挙げて居るのが困りものなれども自分と共の子の児の来らん
時、デモゴルゴンも自身が来りて Jupiter が何か
と問ふと是れ永遠也と答へて descend, and follow me down
the abyss. 之より世は我と共に暗黒に入る（ふかふかと）と言って陣
に下る、天の位を去る、場面がかはりて Hercules が
Hercules に解縛せられ〔?〕。第四幕
場で Demogorgon が Heaven の Despotism を亡ぼした
Love は勝てり



希望なき望みを生み、死よりも夜よりも黒い悪を許し、
万能の天の権威を拒み去りし、再び望み、変ぜ
ず臆せず悔いず、是善也、大也、悦び也、美也、自由也
This is alone Life, Joy, Empire, and Victory とぞに
結ぶ。天の力と人の力が勝って人の自由独立を生じ是を
生命とするとする也、神も畢竟は人の己に帰す、超越的
能力を否定するに拘らず、思想は今日も不偏也

①

# Matthew Arnold (1822–1888)

英十九世紀後半の詩壇に一方にRossetti等の情緒派もあつたが
あつたと共に他方にArnold等の知識派もあり事は既に評論に於
て述べた。Arnoldの傍から先づざつと話して見ように。1822十二月廿四
日のうまれで父は中学校長であり史家教育家であり家
として名ある人、そこでアーノルド父はArnoldを学んだ時代
地に甚に静思した詩篇 と卒業せられ
運命は特別に動かされなかつた様子である。1847
年二十五でLansdowneの議長の秘書官であり
1851年School Inspectorに任ぜられ結婚し、1886年までこれ職

…、之より先き1849年に已に彼れは詩人として The Strayed Reveller and other Poems を A と云ふ匿名で出した。併し余り世の注目を惹かぬ形跡であつたか、併しそれも直ちに市場から引上げてしまつて、1852年に再び A と云ふ匿名で Empedocles on Etna and other Poems を出したが之亦五十部と売れない前に引上げてしまつて、併し此れ（中の或部）は後年 Browning の勧めで最後の詩集の中に収めて、此は1853年の "Poems" で中には旧作も再刊せられて交つてあるが此集で始めて彼れは世に認めらるる端を開いて、而して此集には序文に詩論を加へて居るである。此序が彼を批評家として世に出した処である。1855年には其第二集が出て1867年には New Poems（女主人公）



の名）が出てから殆ど断絶して1867年 New Poems が出て之が彼の詩集の最後である。但し晩年も詩興は必ずしも因れず時々作りはした。彼れは殆ど1857—1867年最後の集をも出す近の断絶の前十年即ち Oxford の Professor of Poetry の地位を占めて居る。其の講義を出版したものでは On Translating Homer (1861) と the Study of Celtic Literature (1867) とが最も有名である。又1865年には其の有名な Essays in Criticism の第一集が出で1879年には Mixed Essays が出で1888年（彼の死後）Essays in Criticism の第二巻が出た。又彼は米国アメリカへ出掛けて講演をして廻つて、併し之は原り成功しなかつたとしても Discourses in America が其書である。

（彼の死は1888年四月十五日である）

由来彼れは始めは官の視学としての余文に於いても批評家とは
[illegible]の詩の出るまで認められなかつた。彼れ
は晩年字義通り、政治宗教のことに迄亘つて論議したが
此方は割合に遠見を缺いて居たのか当時と言はゞ彼は文規
学者として殊に後進の批評家に佛を鼓舞するため規範として
之等の材料を取れて来いと論じた。彼が詩人として
私淑したのはギリシアの[illegible]とゲーテ、ワーヅワース一派で
此等の影響が少なくない。又批評家として
は仏の Sainte Beuve を私淑し[illegible]之を比せらる
に至つて批評家としては十九世紀殆んど第一の人だ。詩人としても
高い地位を持つ人である。今は両面から之を論じなくては
ならぬ。此人を研究するには彼の作品集は前に挙げた様なものを見て



一冊として書物が論文は之等の書物別々につけて見る外はない、
彼を評論したものとしては大したものがないが彼を詩人として推奨
した近代の最初の人は Swinburne であつた。夫の名高いア
メリカの批評家に於ける Stedman はアーノルドを以て
詩人と批評と両方を兼ねしかも一人で出来たものとすていた記録で
此例は Coleridge 以下幾らもあるまい。尚アーノルドの
文学以外の評論としては Culture and Anarchy
(1869) St. Paul and Protestantism (1870)
Literature and Dogma (1873) Last Essays
on Church and Religion (1877)

⑥

"Irish Essays, and Others" (1882) 及論文の[illegible]
等がある。彼は又千八百八十三年二千五百円程の年金
を政府から受ける事になって

⑦

[illegible]
アーノルドが言ふ様に、その[illegible]感情の調子と評論家としての
調子とは違って居るのである。彼が批評家としての時には
物ひとつ識ずることなく働く世の人となるから人世に対しておのづから
思慮して評論をつけ出来る所を[illegible]見もしねる。
即ち知識で批へつけて静かに平和に行って得る。併しながら
に折へつけた[illegible]正平和でもあり謙しい詩人の時は
に[illegible]の事、毒とした[illegible]調子である。彼の批評家
として一種の最も劇な[illegible]作家であるのは材料である。然るに一たび詩人と
して其生きた感情をのべんとする時には其平和満足の底にある
[illegible]して不安よりの根本を打出されれば
時々に不安な懐疑的な絶望的な詩人となる

~~兵に上の芸術であるものはアーノルドの中にあつて最も純粋なものである。~~

彼の有名な輓詩 Thyrsis を例に引く（これでもうサーシスは牧

童の名である。古詩 氏を偲んで友人の Arthur Hugh Clough を引

き上げて作つたもので、彼等が共に学んだ〔Oxford〕近辺の自然の景をよく

織つて美しい詩を歌はせられた。周囲の種々な彼の最も見事な作の

一つである。併し中身は〔illegible〕専ら此地方を共に逍遥したり

などの追懐で、叙景などによい所があるけれども思想の上では Tennyson の

輓詩 Sのやうな 輓詩のやうな深みはなく、〔illegible〕其の調子も例へば

テニスン体（同じ平和でも）の遠くに及ばないで、心あるとすると飛び

跳ね込んだがアーノルドのはただもう全く一人ではせめて手も単ぬやうな

ものから Let in thy voice a whisper of the Come



しとする。〔illegible〕然しそれも初期に於て最も〔illegible〕似て見えなく

後の思想しも着実なれば或る程度の感じがなかつて来て

詩人としても熱が冷えて批評家となつて方向を転じて、調子

が出て来ない。即ち晩年の作には静かな神の調子が後の詩

には出て来る〔illegible〕ものである。此点から言へば彼の詩にもおのづ

から静寂の一面と不安な懐疑的の一面とがあるといつてよい

即ちそれで甚だ〔illegible〕は抑へて〔illegible〕不安懐疑の一面の方にあるやうに見える

寿し之れであるの研究の点は彼の時代の一面を許すけれなく

只併しこれらのであるから〔illegible〕彼の〔illegible〕と之を純化し若しくは鎮

静せんとしたものであるが、〔illegible〕同時に深い実の味が偲えてくる

の意味である。静かな詩の〔illegible〕例としては

~~乾燥な物語詩人の中でも最も〔illegible〕の中では~~ 〔illegible〕

To chase fatigue and fear!
Why faintest thou? I wander'd till I died.
Roam on! The light we sought is shining still.
Dost thou ask proof? Our tree yet crowns the hill,
Our Scholar travels yet the loved hillside.

即ち詩は昔の思ひにあるから世々代々に降誘するを運ばない。けれども
tree とあるは丘上の一本の木の下で二人が目指して歩いて行つたもの
が前の郊つて来て直る。又 scholar とあるは他にも Scholar Gipsy と題する
詩があつて此の時しなき此地の記憶であつたらしい。一人の学生が学業に究止
Gipsy の仲間に入つて或は丘の辺で学生友に逢つて物語をしたと云ふ事
を指していふのである。さて彼の詩のもの寂しき気色と見る一寸方面にいると
例へば物語詩で彼の詩中最もポピュラーな The Forsaken Merman



即ち人魚の雄が子供を連れて陸の中をさまよひ恋人を招いてくれよ
といふて絶望的ではないか金持になれよせて優しくヤーントが
よくいふに alone の情 すなはち敗の forsaken の情が現つて
来る。おのづから人生の淋しい侘びなさと不安定の情を
運命のひある。又抒情的な詩では The Summer Night
の如きも推移（ともなく）せらるるものであるが寂しい方が例の静寂悲しみ
の風ある調子になつて Hast thou not good to abide here and
breathe free;
How fair a lot to fill
Is left to each man still!
(Arn)
と読んで我ずれども我一の

(12)

一擲一ニ浦ガ如キ中央の自然(?)を仰いでの其の述懐で

In the deserted, moon-blanch'd street,
How lonely rings the echo of my feet!
And the calm moonlight seems to say:
Hast thou then still the old unquiet breast,
Which neither deadens into rest,
Nor ever feels the fiery glow
That whirls the spirit from itself away,
But fluctuates to and fro,
Never by passion quite possess'd
And never quite benumb'd by the (make powerless)
world's sway?

と云ふ月の言葉に自分の胸中を言はせたのが其の好例である

(12)

更に進んだ例は同じく静観的な Dover Beach にである。之れ[illegible]
であるとセルメートが出掛の音に寄せては ... and bring the eternal
note of sadness in と云ふ読せし

Sophocles long ago
Heard it on the Aegaean, and it brought
Into his mind the turbid (disordered) ebb and flow
Of human misery;—

と云ひ

The Sea of Faith は嘗ては地球をめぐつて包んで居たが

But now I only hear
Its melancholy, long, withdrawing roar

ひあつての新に世界の[illegible]は[illegible]で行く一く

(14)

見えても

Hath really neither joy, nor love, nor light,
Nor certitude, nor peace, nor help for pain;
And we are here as on a darkling plain
Swept with confused alarms of struggle and flight,
Where ignorant armies clash by night.

とすると加様な語句で前の句と同じく知らぬ(?)が通り。詩である。併し此苦い興味は夫の Empedocles on Etna で此を戯曲詩に至て最も極点に達す。此詩は即ち

(15)

Empedocles が Etna の噴火口に飛び込んで自殺したと（希臘のピタゴラスの弟子の一人である）

詩を~~[illegible]~~而して作った詩で其前詩は集中に於ける書目(作者が甚集は)最もで引込めて後の詩集の序に甚だ引込めた理由は此詩にある事を述べて居るので其が即して此の理由が最もよく前に言つて例の生の上の文学と詩として感情に任せて描かれた運を説明して居る。即ち作者は後から考へて見て此詩は中身が詩として適せぬとして引込めたのであつて凡て下の如きは詩として許すべからず即ち — in which suffering finds no vent (opening) in action; in which a continuous state of mental distress is prolonged, unrelieved by

incident, hope, or resistance; in which there is every thing to be endured, nothing to be done. In such situations there is inevitably something morbid; in the description of them, something monotonous. When they occur in actual life they are painful, not tragic; the representation of them in poetry is painful also.

といふのである。絶望的のものは始に動きといふものがない。之は動く紀周として詩になつていけんに此詩は二幕から成つてゐて



アーノルドが道徳上（写実上）主義と真逆反対な文芸故を以て一旦引込めたる劇詩 Empedocles の経歴は二幕から成つてゐる。第一幕は政治の荒蕪から頂上まで Empedocles が弟子の医者 Pausanias と登りゆく所で Callicles といふ牧童で竪琴を弾ずるもの（此は）を其先にして音楽の実用にならうのを防いであるホーサニアスとカリクレスとの掛合ひの記で後、ホーサニアムが牧童の使として頂に近い山へ上るとエムペドクレスはクレスと逢ふ。此処で琴を弾かんとしてゐる。

Mind is the spell which governs earth and heaven.

Man has a mind with which to plan his safety;

とよやうな哲学を述べるとポーサニアスは併し一方には師は

Mind is a light which the gods mock us with,
To lead those false who trust it.

と説明、鈴々ではなりかなどいふ人を信じ人を疑ふ両端の見を歌は甘いものである山の中腹までカリクレスの歌がきこえ又琴の音がきこえるエムペドクレスはこれをきいて琴の音に和して長い雄壮な調子の述懐を歌ふ

And we feel, day and night,
The burden of ourselves —

といひて自分の存在を重荷を感ずといひ我々は快楽の花から花を追ってあちこちかれてゐるが

Nor do we soon perceive how fast
Our youth is spent.



でふたゝび我等の眼が眼になると云ふに歳月は逝き五官は衰へ

Our shining heart is mined by secret discontent

を語るに至り —

That longing of our youth
Burns ever unconsumed,
Still hungrier for delight as delight grows more rare.

青年の悦楽の過ぎ去りがたきを偶に悲しむとよふけれどゲーテを思はしめる、そしてエムペドクレスは自分は一人でゐるからポーサニアスは帰って呉れといって返す　第二幕になって山の頂上でたゞ一人自分で自分を憐んで歌ふ、世の人のやうに満足して一緒に生きてゐれなく不幸になって来て拙く歌って生きてゐるのだと云ふ　又下の方からカリクレスの歌が聞

たえる、気を受けてエムペドクレスは叫び出す到る所 heart が
たぎる地を蹴つて行くとして光栄の目を醒めては疑惑の情を
眺めて久しく苦しいことを立て[illegible]を述べ、[illegible]月桂樹の枝を
差し出んでそれに向つて生きて行くのであるが今は

I am weary of thee
I am weary of the solitude
Where he who bears thee must abide —

であるか

Take thy bough, set me free from my solitude;
I have been enough alone!

といつて遂に捨てると夜は深く更けて行く、空を見上げて、彼自身
も今は喜びの世界であつたのが今は見る影もなく夜も微もなく



其の大天上を我と同じく存在に疲れてさまよふのではないか
[illegible]ある我れひとり生と光とに死んでゐるのに又その
丸てに死を迎ふのか

Am dead to life and joy, therefore I read
In all things my own deadness.
— I alone

と言いて喜ばしく又默々として火口に進んで又彼は「女よ」と叫んで行く
輝き[illegible]も生気のなく疲れて行くけれども、我今なやまし
さくの[illegible]ではないけ heart は燃えて再び輝かない心は

Nothing but a devouring (consuming)
flame of thought —
But a naked, eternally restless mind,

で尋ねば自分の立場を抱いて我死なば体は土に
血は水に熱は火に息は空気にそれぞれ来りし本の元素
に還らうがひとり我が霊魂は存したら何処へ還るであらうか
還るところなくして不滅に何のために残らば死すとも其の[illegible]
生にありかんの苦情を識りつくしても依然として苦しからう
死もまた我を救ふに足らざるか、我は不死なれども又[illegible]世
に四つ[illegible]のにも非ず、思ひて此処に至り[illegible]る時心せはしく
来し此方に早く五十の火よ我を焼きつくせ[illegible]
再び纏の苦みに入るに忍びず

Receive me, save me!

と叫んで火に飛び入る。[illegible]にはかりしれず熟[illegible]下から
立ちのぼる[illegible]ことを[illegible]踊りである。



批評家としてのアーノルドの立場は何うであるか先づ彼れが一般
要上述法の立場を見るに order の必要（認むること）sanity of life を保ち
わくを批評とする 言ひかへれば self-poised and harmonious で
あるを更に言ひかへれば 吾人 life を steadily and see it whole である。
而断して之を life の根本を忘れ自づからの中に執する即ち
一種の力ある標準を我の内に立て之によりて世を統一せんとする
social でもあると称せらるゝ所以である。而して彼れが文藝批評家
としての立場も亦一面在しこれが倒停してある。由来彼れの批
評家としての立場は凡て其の是非を暫く措きて認めなければ
[illegible]はクラシカルとなって、
第二は

(24)

モーラルとする、けれ共之を説明すれば人生の批評となるので
（第三はコスモポリタンとする第四はレボリューションとする）
換言すれば先づクラシカルとは Serenity が Nestor Classics
と呼んで居るもので例へば Dr. Warren's Classics の Q. Science and
Literature の中に英国の文藝が統一して居る Symmetry であ
るのだ Fit details strictly combined, in view of a
large general result nobly conceived. が最も要であるに
部分々々は如何なるものがあっても中心は之を統一する根本
物が統一して居ると云ふ要素のである。
又之と連絡して第二のモーラルとは其の説話 Noble と云ふことで

(25)

ラスキンも大切に考へたもので前にいった所を一種の道徳的色彩を
含んだものである。又彼は Essays in Criticism の第二集で The Study
of Poetry を論じて（詩は詩の中で）詩は Criticism of Life である Application of
Idea to Life 即ち思想を人生に應用したものとしてある即ち
之れから high seriousness of great classics 即ち大なるクラシックスの性
質至高嚴粛の意義がある。即ち high seriousness 其は文意
absolute sincerity から来るもので あると云ふ詩は結局
的韻律の美を加へて一に帰する。之が重なる
主の評價である。又彼の同書第一集で Function of Criticism at

第三の例は

Present Time では緩小は更に名高き批評の定義を下して disinterested endeavour to learn and propagate the best that is known and thought in the world 即ち世界に於ける最善最上のものを研究して世に之を知らしめんとする努力なりと言ひて其結果を一にし之を有名な比較研究[illegible]を唱説して Criticism which regards Europe as being, for intellectual and spiritual purposes, one great confederation, bound to a joint action and working to a common result. であつて世界の[illegible]最上のものを研究するとすれば東西の別を執しては行かぬと云ふので之は今日の我々にはよく分るが当時の英国には非常



な適切なものであつて之れ未だ比較研究と云ふ事が附けられ起つて といはれるのであれば今日の状態を考へ合せて其事等ぞ、殊に西の革命的と云ふ例は三名な[illegible]集中の Heine 論の中で例の三名なハイネの語 我れ死なば我が柩の上に剣を置け 吾は I was a brave soldier in the Liberation War of humanity といふのを引いてゲーテが最高調の事業を遂げんとしゲーテ

5 I had been their liberator といつて基づくと見、総一代の事業は Philistines との戦であるとし 又安く同一の紳士であるとし当年の人は旧習硬陋の思想の因習は小から人を救けんとしたものと云ふ 是に全陽の同情

を挙げて習要するに能はず思はれた一面厳粛なる絵で
書と其に他面非常に新しい革命的な所を見し批評されて
も一面クラシカルな全体形式などの上を重んじ文 一種の標準を立てる
エムペドクレスを引いてある論文の如く極端を避ける動機とせ
に一面文全く自由な手に所 口語 [illegible]
又は comparative study をもって研究する人々